

オイラトの英雄民話、英雄叙事詩における岩石崇拝の観念(1)

B.ダムリンジャブ 著/ボルジギン・オルトナスト 訳

キーワード：英雄民話、英雄叙事詩、岩石崇拝

オイラトの英雄民話、英雄叙事詩や神話において石や岩を神聖視するという認識は広く見られ、岩石崇拝と関係する信仰、習俗のモチーフも多様に語られる。

石器時代、石は生産過程における主要な道具となっていた。古代人は石で、斧、刀などの道具を作り、生業、生活、戦争に広く使用していた。

古代、石や岩は人々の生活と密接な関係を持っていたため、人々は常に石を意識し、それを神聖視し、特に普通の石と異なる形状を持つ石を信仰と畏敬の対象としていたため、石や岩を信仰する多様な文化が形成された。

オイラトの英雄民話、英雄叙事詩などには古代社会の歴史と文化に大きな役目を果たしてきた石器、青銅器などに関する認識の反映されている箇所が多く見られる。それは石器時代から継承されてきた口承文芸に反映された痕跡であることの証左となるものである。石文化や岩石崇拝が、古代の英雄民話、英雄叙事詩に大きな影響を及ぼし、石器時代の石文化の観念がそこに深く浸透していることは、英雄民話、英雄叙事詩の起源を検討する上で貴重な示唆を与えるものと考えられる。

岩石信仰は世界の諸民族における古代信仰の一形態であり、特に中央アジアの諸民族には大きな影響を与えた。そのため英雄民話、英雄叙事詩などの口承文芸における岩石信仰の反映は、当時の人々の思想の表象とも考えられる。

モンゴル系諸族の間で、長い間伝承されてきた英雄民話、神話や『ジャンガル物語』、『ゲセル物語』、『ハン・ハランゴイ物語』(2)等の英雄叙事詩においては、ハーンたる父親、皇后たる母親が岩石に跪拝して子宝が授かることを願う、英雄たちが岩石から生まれる、そして手に石を握って生まれる、誕生時に、臍の緒を石で切る(3)、精霊を石に隠す、ジャダ石(4)で雹を降らし敵を退治する、マンガス(5)を岩石の下に埋める、人を岩石の中に置いて生き返らせる、失明した者が石を触ることで失明を治す、吃音症の者が石を舐めて話せるようになる、石を食って生きのびる、石に変身するなど、石や岩が霊力のある存在として語られ、描写されるという特徴は広く見られる。更に、口承文芸における英雄たちが騎乗する馬に関しても岩石から生まれる、敵が英雄を殺す際にその死体を岩の下に埋めるなどの場面が見られる。

英雄民話や英雄叙事詩におけるこれらの語り口は、石器時代の生業の反映である一方、人類が太古から起源をもつ口承文芸における石器類の霊力を信じてきた、石信仰の痕跡であることを示すものである。

1 英雄が石から生まれるモチーフ

物語の主人公が岩石から生まれるモチーフは、英雄民話、英雄叙事詩で多く語られる。これは古代モンゴルの原始信仰——石信仰の観念である一方、人間は岩石から生まれたと認識していた古代人の安易な推量である。こうした観念は多くの英雄民話にも反映されている。例えば、「ガグチャ・トゥルセン・ガルダムト・オラーン・バートル」¹という英雄民話では、ホルモスタン・アブ(6)(天神)は、ホニ・チャガン、ホラガ・チャガン、アルタン・テベグという三人の息子に対して「この世界を廻り、中つ世界においてハーンとなる定めの人を捜して来い」と命じた。三男のアルタン・テベグは上つ世界を探したが、ハーンとなる定めの人に出会わないため、中つ世界に降りて探していた。その時、天に届くような白い家の側に一匹の馬が繋がっていた。その家から一人の長身の者が出てきて、衣装を正してから、再び家に入る。アルタン・テベグが近づくとその家は青白い岩と化した。アルタン・テベグは自分の家に戻り、先の出来事を父親に報告すると、父親は「その者は中つ世界でハーンとなる定めで生まれた、ハーン石(7)の父、ハートン石(8)の母、ウレル石(9)の姉を持つ、ガグチャ・トゥルセン・ガルダムト・オラーン・バートルである。その人は岩石から生まれた者なので、彼を圧する者はこの世界にはいない」と語られる。

この物語の主人公ガルダムト・オラーン・バートルは、人々に神聖視される岩石から生まれたため、彼を圧する者はこの世にいないという内容が伝わっている。

また、主人公が岩石から生まれることに止まらず、騎乗する馬も岩石から生まれるというモチーフもオイラトの英雄民話で広く語られる。例えば、「エルイン・サイン・トルチグ・メルゲン」²という英雄民話では、主人公トルチグ・メルゲンは、「エル石(10)の父、エム石(11)の母の子……」と自分のことを紹介する。「ガルデ・ハラ・ハルジャン・モリタイ・ハルジャン・オラーン・バートル」³という英雄民話では、「ハーン石の息子、ガルデ・ハラ・ハルジャン・モリタイ・ハルジャン・オラーン・バートル」と登場する。「エルヒ・ムングン・シグシルグ」⁴という英雄民話では、「エルヒ・ムングン・シグシルグは石の家、狼のような心臓を持ち、黒い剣を握って母親から生まれた」と語られる。「マジグ・オラーン・ゲデグ・ジャロー」⁵という英雄民話では、「一つの大きな白い石が動いていて、その中から片手に剣を握った若い英雄が生まれる。その若い英雄は『私は天の系統を引くこの白い石から生まれた。他者に教えないでください』と言った」と語られる。

英雄民話、英雄叙事詩などの主人公が勇猛な相貌で描写されている主な原因は、彼らが岩石から誕生するというモチーフと密接な関係があり、それが古代の石信仰に起因するためであると推測される。

古代の諸民族にあった、自分の出自を岩石及び洞窟に求めるという観念が、のちに英雄民話や英雄叙事詩に反映されたものと考えられる。

さらに、英雄民話、英雄叙事詩の主人公が岩石から誕生するというモチーフと同様、敵側の魔神(マングス)も、岩石から誕生するというモチーフも少なからず語られる。主人公の英雄が騎乗する馬も岩石から生まれるというモチーフも多く見られる。例えば、「ハラ・ハランガ」⁶という英雄民話において、英雄ハラ・ハランガの騎乗する馬は岩石から生まれた、狼のような青い馬だと描写される。

英雄民話、英雄叙事詩に見られる岩石から生まれるという観念は、古代人の岩石崇拝に起因するものであり、当時の人々の思想や信仰を表象するものと考えられる。

2 英雄が手に石を握り、或いは口に石を銜えて誕生するモチーフ

モンゴルの英雄民話、英雄叙事詩における主人公、手に石を握って、或いは口に石を銜えて生まれるモチーフは多く見られる。このように古代の岩石崇拜の観念が英雄民話、英雄叙事詩に反映されている事例は実に多い。例えば、「エルテ・トゥルグセン・エゲル・エルゲン」⁷という英雄叙事詩では、英雄エゲル・メルゲンは、「母親から生まれ落ちる際、口に金剛石の剣を銜え、手に黒い凝血を握って生まれた」と語られる。「アル・ボムバイン・アルタン・バガナ・アルサランギン・アラグ・オラーン・ホンゴルの賛美歌」⁸において、

「右のこめかみに

親指で押されたような痣あり

羊のような白い痣あり

右肩に

親指で押されたような痣あり

火のような赤い痣あり

右手にアヒルの足のような矢を

握って生まれし

左手に

ジャダの青い石を

握って生まれし……飛ぶようなシオンホル

精悍に育ったホンゴル(12)」と語られ、ホンゴルの相貌が讃えられる。

周知のように、『ジャンガル』の12の英雄、36のボトン(13)の中において、ホンゴルは、格別に卓越した戦闘力、抜きん出た勇敢さで登場する。ホンゴルのそのような精悍な相貌は、手に石を握って生まれたということと、恐らく直接関係すると描写される。ホンゴルの不思議な力は、霊力のある金剛石の剣を口に銜えて生まれたことと何らかの関係があると強調される。

ホンゴルが、ジャダ石、金剛石を手握って、或いは口に銜えて生まれるように語られていることは、ホンゴルの勇猛な相貌を象徴する一方、ジャダ石、金剛石の持つ霊力を信仰し、畏敬するという石信仰の観念と関係するものと考えられる。

3 英雄の臍の緒を石で切るモチーフ

英雄民話、英雄叙事詩において、生まれたばかりの英雄の臍の緒を石で切る、或いは二つの石の間に挟んで切るというモチーフは広く見られる。このことは太古の人々の石や磨製した石斧等を使用していた時の痕跡を示すものと考えられる。例えば、「ネグ・ジャオン・ジラン・ジルガーン・ナスタイ・ジランタイ・エブゲン⁹ (160歳のジランタイ爺さん)」という英雄民話では、「ボム・エルデニという英雄が生まれ、臍の緒を切る際に、すべての鋭利な道具を使い果たし、すべての先の尖った道具の先が折れた。そのため、英雄ボム・エルデニの臍の緒を切る道具が見つからなくなる。その際、3歳の種

雄ラクダのような黒い岩を持ってきて、その間に英雄ボム・エルデニの臍の緒を置いて、挟み打ったらやっとな緒が切れた」と語られる。『ゲセル・ハーン』¹⁰という英雄叙事詩では、「ゲセルが生まれ、その臍の緒を切る時、生家の前に置かれていた白と黒の二個の石以外のもので、ゲセルの臍の緒を切ることができなかったという。そして、ゲセルの臍の緒をその黒と白の石の上において、叩いて切った」と語られる。

このようなモチーフは、石器時代の生業の投影である一方、古代人の、石の靈力を信仰し、畏敬していた観念と繋がるのが明瞭である。

石器時代、石や岩は、人々の生業や日常の使用に大きな役目を果たしていたので、生まれたばかりの赤ちゃんの臍の緒を切るためには、二つの石で叩いて切るか、磨製した石で切る以外に成す術がなかった。その一方、石は古代人の労働の道具として、人々の生存と安住において、大きな影響を与えていたため、石を以て英雄の臍の緒を切るというモチーフは、英雄民話、英雄叙事詩に深く影響し、伝承され残されたと考えられる。

4 ジャダを取る、或いは石の雹を降らせるモチーフ

オイラトの英雄民話、英雄叙事詩には、英雄やその騎乗する馬が、ジャダを取り、寒風を起し、雨を降らす、或いはジャダ石の靈力で、マンガスを退治するというモチーフが見られる。特に、英雄がマンガスを退治し、マンガスの妻の腹を剣で割く時、その腹から赤ちゃんが出てきて、英雄たちと格闘する。マンガスの息子が英雄と格闘している時、或いは英雄がマンガスの息子に力負けする際、英雄がジャダを取り、石の雹を降らし、寒風を巻き起こすなどの魔術で、マンガスの息子の臍の緒を凍傷させてようやく退治するというモチーフも多い。特に興味深いのは、英雄がマンガスの息子に負け、殺される寸前に、英雄の馬がジャダを取り、寒風を巻き起こし、マンガスの息子の臍の緒を凍傷させて殺し、主人を助けるというシナリオも見られることである。例えば、「ナラン・ボグダ・ハーン」¹¹という英雄民話では、「英雄アルタン・テベグ・ババイは、15の頭を持つマンガスと組み討ちするが、互いを打ち負かすことができず、数年間戦いを続けていた時、英雄の黄金色の馬が耳を左右に動かし、ジャダの黒い石を降らし、その石で、マンガスの主要な五つの頭を切断してくれ、それによって英雄アルタン・テベグがマンガスを退治する」と語られる。「エルデニ・フレン・モリタイ・エルヒ・ムングン・シグシルゲ」¹²、「ハラ・ハラング」¹³、「フデギン・フフ・モノン」¹⁴、「ガラホ・ナラン・ハーン・フベグン」¹⁵、「ガラダマト・オラーン・パートル」¹⁶、「ボマ・サヤ・ナソタイ・ボソル・アルダル・ハーン」¹⁷等の英雄民話の主人公は、マンガス、或いはマンガスの息子と戦って、負ける際、英雄の馬がジャダを取り、寒風を巻き起こし、マンガスの息子の臍の緒を凍傷させて殺し、主人を救出する。また、英雄自身がジャダを取り、石の雹を降らし、マンガスを退治するという事例も多く見られる。ジャダ石とは、靈力のある一種の特殊な石である。

ジャダを取るとは、特別な石の靈力によって、自分の願望を達成させるという行為を指す。モンゴル人が太古から信仰してきたシャマニズムは、ジャダとジャダ石を、靈力のあるものと畏敬する。そのため、ジャダを取るという行為は、ジャダ石の靈力で、天空から雨を降らし、寒風を巻き起こし、

雹や石を降らすなどの作用を指す。ジャダ石に関しては、モンゴルの古代の文献にも少なからず見られる。例えば、『モンゴル秘史』では、「明日両方（ボイドル・ハーンとホトガ）は、フイテンというところで出会い、合戦した。そして、ボイドル・ハーンとホトガの二人は、ジャダの方法を知っていた。その二人は互いにジャダを取ると、その魔法が彼等の上に発生し（降り注ぎ）、そして泥沼に陥り、行けなくなると『我等は天の怒りを買った』と言い合い、逃げ去った」¹⁸という箇所が見られる。

5 英雄が石で敵を圧殺するモチーフ

オイラトの多くの英雄民話、英雄叙事詩において、英雄が敵側のマンガスを殺し、その肉を千切りにし、火打石の火で燃やし、その不潔な灰を、牛のように大きな黒い石の下に埋めるというモチーフが見られる。或いは、敵側のマンガスが、英雄を殺し、牛のような大きな黒い石で圧するというモチーフも見られる。例えば、英雄民話「ガルダン・オラーン・バトル」¹⁹では、「英雄ガルダン・オラーン・バトルは、ゴナン・ハラ・マンガスを殺し、マンガスの肉を千切りにし、火打石の火で燃やし、その灰をマンガスの心嚢に入れて、牛のように大きな黒い石の下に埋める」と語られる。英雄民話「エルイン・サイン・エメレジェフ」²⁰には、「英雄エルイン・サイン・エメレジェフは、妖姥を殺し、牛のように大きな黒い石で圧する」と語られる。英雄民話「エルテ・トゥルグセン・エルゲル・メルゲン」²¹では、「英雄エルゲル・メルゲンは兄弟 90 人のマンガスと奮闘し、絶滅させ、山のように大きな火を燃やし、盲腸のような火種の上で、マンガスの肉を焼き尽くし、その骨を牛のように大きな黒い石で圧する」と語られる。

多くの英雄民話、英雄叙事詩において、マンガスを殺した後、その亡骸を必ず牛のように大きな黒い石で圧するというモチーフが語られることは、岩石信仰がオイラト人の間に長年継承されてきた習俗であることを意味する一方、古代の生業、信仰、思想の範疇においても、石信仰が大きな比重を占めていたことを示すものと理解されよう。

6 石を抱き子供を産む、石で押し子供を産ませるモチーフ

子供が生まれるには月が足りないのに、母親が石を抱き、月足らずの子供を産むモチーフや、英雄がマンガスに負けて殺される寸前に、英雄の妻が月足らずの男児を産み、父親の後を追わせ、救出作戦に加わらせるというモチーフは、オイラトの英雄民話や英雄叙事詩に見られる。このことは、古代人の石の霊力を信仰する観念との繋がりを示すものである。

マンガスを殺す時、その肉を千切りにし、火打石の火で燃やすモチーフは、火の霊力を畏敬するという火信仰に由来するものと考えられる。マンガスの亡骸を牛のように大きな黒い石で圧するというモチーフは、巨石を普通の石より神聖視するという思想を反映するものである。モンゴル人は常に巨石をウヘル・チロー、つまり、牛のように大きい石と称する習慣がある。ウヘル・ハラ・チローとは、「牛のような黒い巨石」のことである。

黒い色は、モンゴル人の観念では、頑丈を象徴する。頑丈な巨石で、亡骸を圧することは、その亡

骸の靈魂の再生を警戒するという靈魂觀念を示す一方、古代人の岩石崇拝と関連するものであると考えられる。また、黒色は、方角の象徴とも関わる心性を示すものである。

オイラトの英雄民話、英雄叙事詩において、母親が石を抱いて子供を産む、或いは母親の腹を石で押して、子供を産ませるモチーフは広く見られる。例えば、英雄民話「アルハランギン・アラグタイ・フデギン・フフ・モナ」²²では、「英雄フデギン・フフ・モナは母親が妊娠五ヶ月の時、母親が黒い石を抱いて産まれた月足らずの子供で、谷間に置かれた」と語られる。英雄民話「ブフ・ムンゲン・シグシルグ」²³では、「英雄ブフ・ムンゲン・シグシルグは敵側の捕虜となった際、『お腹にいる息子を早く産み、ぼくの後に行かせ、助けてほしい』という夢を、自分の妻に見せる。英雄の妻は、祖先の三人の白いシャーマンのところに赴き、妊娠三ヶ月の息子を産ませてくれるように頼む。そして、祖先の三人の白いシャーマンが、湧き出る聖水の側に英雄の妊娠中の妻を連れて来て、三個の平たい石で、英雄の妻の腹を押し、息子を産ませる。そして、祖先の三人の白いシャーマンは呪文を唱え、生まれたばかりの息子を成長させ、父親の後へ行かせると、その息子は、敵を退治し、父親を救出し連れて帰る」と語られる。

オイラト人は、石や岩に靈力が宿っていると見なし、石を万物の創造主と信じていた。子供を産む際にも、そのような靈力のある石を抱いて、或いは、月足らずの子供をも、そのような靈力のある石で押して、産ませることが可能であるという觀念が、上記の事例に反映されている。

7 靈魂を石に保管するモチーフ

オイラト人は世界の諸族と同様、アニミズムの觀念を持っている。そのため、英雄民話、英雄叙事詩における主人公、敵側のマンガスや騎乗する馬は、多くの場合特別な靈魂を持っていると描写される。この時、彼らの靈魂は、まず、彼らの身体に宿っている。次に、彼らの身体に存在しない靈魂は、人間や他の動物が近づきがたい遠方、しかも見つからない秘所に隠されていると語られる。更に、このような靈魂を特別な巨獣、或いは靈力のある物体に隠したり、そのような巨獣や物体の名前で命名するという特徴も見られる。

オイラトの英雄民話、英雄叙事詩において、英雄は靈魂を岩石に隠し、それを Qada ČilaGu「岩石」と称することが多い。例えば、英雄民話「ザーン・チャガン・モリタイ・ツァンプティブイン・サイン・ハーン」²⁴（白象のような駿馬に跨った世界の良きハーン）では、「……英雄アルタン・フブグンは、山の頂上に登り、辺りを見渡すと、七人のマンガスの靈魂が宿っている宝石が輝いていた。英雄アルタン・フブグンはその石を拾い、砕いて割ると、七人のマンガスの命が絶えた」と語られる。また他の英雄民話では「三人兄弟マンガスの靈魂が漂い、そのうち二人の兄マンガスの靈魂が彼らの家の門の前にある二個の白い石に隠してあった二個の卵石である」と語られる。

英雄民話、神話、英雄叙事詩において、英雄、マンガスや馬が、常に自分の靈魂を何らかの石の中に隠すという觀念、自分の靈魂を「石」と称するモチーフは、岩石を、万物を創造する靈力のあるもの、最も頑丈な存在の象徴として神聖視するという古代人の考えに端を発するものである。一方、古代人における、人の靈魂は山岳や岩石に由来するという岩石信仰の觀念とも繋がるものである。

8 石を食い生きしのぐ、石を触り失明が回復する、石を握り吃りが回復するモチーフ

英雄民話、英雄叙事詩の英雄たちが石を食って生きのびる、盲人が石を触ったり握ったりして失明を回復する、或いは特別な石を舐めて、動物の言葉を話せるようになるというモチーフも広く語られる。これらの現象は、石の持つ靈力を信仰するという古代人の石信仰に起因するものである。例えば、英雄民話「チャガン・サナータイ・フブグン・ボロン・ハラ・サナータイ・フブグン²⁵（良心の子、悪心の子）」では、「善意のある盲人の男児が旅の途中で、道にあったある石を触ってみると、片方の目が回復し、もう一度触るともう片方の目が回復した」と語られる。また、英雄民話「ホヤル・ブフリ・ムングタイ・アハ・ドゥー・ホヤル²⁶（二個の銀塊を有する兄弟）」では、「……井戸の西南に生えている木の根元に鳩の卵大の緑石がある。失明をした者は、その石を眼のところに当てると回復する」と語られる。これらの伝説では、失明した者が、靈力のある石を眼のところに当てたり触ったりすれば、石の靈力がその失明した者の眼に影響を及ぼし、視力が回復するという内容が伝わっている。

また、「バヤン・オラーン・ハーン」²⁷という伝説では、「石を舐めて13種類の動物の言葉が分ようになった」と語られる。また、「アラル・メルゲン」という英雄民話では「マンガスが来て英雄を襲い殺して行く際、英雄の馬が天空から降りて来て、山の洞穴から英雄を引き出し、そして白い岩の下から、赤緑色の土を取ってきて、英雄アラル・メルゲンの口や鼻に入れる。その時、英雄アラル・メルゲンは、『何故こんなにぐっすり眠っていたのだろうか』とつぶやきながら生き返る」と語られる。ここで、赤緑色の土をアラル・メルゲンの口や鼻に入れて、生き返らせたことは重要ではなく、白い岩が強調されていることが注目される。白い岩の根元に存在した赤緑色の土をアラル・メルゲンの口や鼻に入れたことで、白い岩の靈験があらたかになったと考えられる。

モンゴル人は、天が万物を支配し、創造できないものは何一つないと信仰してきた。しかし、ある神話や英雄叙事詩における石は、天の力も敵わないほどの威力をもって描写される。そのことは、モンゴル人の岩石に対する観念や信念を証明するものと考えられる。

オイラトの英雄民話、英雄叙事詩におけるこれらのモチーフは、人類の往古の儀礼、習俗、信仰の観念を示す一方、それが英雄民話や英雄叙事詩を研究する上で、大きな意義を持つものである。

英雄民話、英雄叙事詩が、古代人の岩石観念を多様な形で映じている事から見ても、その淵源は遙か昔に遡ることが推測されよう。

原著注：

¹ 'Tagča Törügsen ~aldamtu UlaGan BaGatur' 新疆ニラハ県フフホトゴル・モンゴル郡の Duuka-yin Čoyijlab (D.チョイジルジャブ) 氏口述。筆者採録(1986年7月6日)。

² 'Er'e-yin Sayin ToGurčaG Mergen' 新疆タヒス県のホジルト・モンゴル郡の Adiy-a -yin Čimed (A.チメド) 氏口述。筆者採録(1989年9月3日)。

³ 'Tarudi Qar-a ~aljan Moritai ~aljan UlaGan BaGatur' 新疆ニラハ県フフホトゴル・モンゴル郡の

Lürei-yin Ajai (L.アジェ) 氏口述。筆者採録 (1986年6月28日)。

- 4 'Erdeni Küreng Moritai Erekei Mönggön Šigširge' 新疆ジン県マンドブラグ郡バヤンのアマン村の Badm-a-yin Möntüger (B.ムントウゲル) 氏口述。筆者採録(1990年9月2日)。
- 5 'MjiG UlaGan Gedeg JalaGu' 新疆ジン県マンドブラグ郡バヤンのアマン村の Badm-a-yin Möntüger (B.ムントウゲル) 氏口述。筆者採録 (1990年9月2日)。
- 6 'Qar-a QrangG-a' 新疆ニラハ県オリヤソタイ郡のバヤンゴル村の Sarbai-yin Gürjab (S.グルジャブ) 氏口述。筆者採録 (1990年10月24日)。
- 7 'Erte Törügsen Egel Mergen' 『ハン・テンゲル』1989年、No.1、p.68。
- 8 'Aru Bumba-yin Oron-u Altan BaGan-a Arslang-un AraG UlaGan QonGor-un MaGtaGal' 『ハン・テンゲル』1989年、No.3、p.111。
- 9 'Nige JaGun Jiran JirGuGan Nasutai Jirantai Ebügen' 新疆ジン県マンドブラグ郡バヤンのアマン村の Badm-a-yin Möntüger (B.ムントウゲル) 氏口述。筆者採録 (1990年9月1日)。
- 10 "Geser QaGan" 『ハン・テンゲル』1990年、No.4、p.22。
- 11 'Naran BoGda QaGan' 新疆タヒス県ホジルト郡の Kidad-un Rabdan (K.ラブダン) 氏口述。筆者採録 (1986年7月12日)。
- 12 注4参照。
- 13 'Qar-a QaragG-a' 新疆ハラ・オソン県タビラハイト・モンゴル郡オモグ村の Öljii-yin Čirai (Ö.チライ) 氏口述。筆者採録 (1986年8月22日)。
- 14 'Ködege-yin Köke Monon' 新疆ニラハ県フフホトゴル・モンゴル郡の Lürei-yin Ajai (L.アザイ) 氏口述。筆者採録 (1986年6月28日)。
- 15 '~arqu Naran QaGan Köbegün' 新疆ニラハ県フフホトゴル・モンゴル郡の Duuka-yin Čoyijlab (D.チョイジルジャブ) 氏口述。筆者採録 (1986年7月5日)。
- 16 '~aldamtu UlaGan BaGatur' 新疆ニラハ県・フフホトゴル・モンゴル郡の Duuka-yin Čoyijlab (D.チョイジルジャブ) 氏口述。筆者採録 (1986年7月5日)。
- 17 'Bum Say-a Nasutai Bosor Aldar QaGan' 新疆ニラハ県・フフホトゴル・モンゴル郡の QabučiG-un Nim-a (Q.ニマ) 氏口述。筆者採録 (1986年6月29日)。
- 18 ~adamba, Š. 1990 "MongGol-un NiGuča Tobčijan" UlaGanBaGatur, p.90 (ガダムバ, Š. 『モンゴル秘史』オラーンバートル)。
- 19 '~aldan UlaGan BaGatur' 新疆ニラハ県・フフホトゴル・モンゴル郡の Urtunasun-u Kügei (U.グヘエ) 氏口述。筆者採録 (1986年7月3日)。
- 20 'Er-e-yin Sayin Emeljekü' 新疆タヒス県ホジルト・モンゴル郡の Manaltu (マナルト) 氏口述。筆者採録 (1982年)。
- 21 'Erte Törügsen Egel Mergen' 新疆タヒス県ホジルト・モンゴル郡の Manaltu (マナルト) 氏口述。筆者採録 (1982年)。
- 22 'Arqalang-un AlaG-tai Ködege-yin Köke Monon' 新疆ニラハ県オリヤソタイ郡バヤンゴル村の Čaraydar-un Onjil (Č.オンジル) 氏口述。筆者採録 (1990年10月25日)。
- 23 'Böke Mönggün Šigširge' 新疆ボルタラ市オルトボラグ郡バガ・ボラガ村の Oroljab-un Bayaka (O.バヤカ) 氏口述。筆者採録 (1990年9月12日)。
- 24 DamrinJab,B, & UlaGantuyaG-a, (Ed) 1996 "JaGan ČaGan Mori-tai Zambutib-un Sayin QaGan" Ündüsüten-ü Keblel-ün Qoriy-a,Begejing (ダムリンジャブ,B & オラーントヤ編『白象のような駿馬に跨った世界の良きハーン』北京：民族出版社) p.555。
- 25 Raši & Döbčin (Ed) 1984 "Söbei MongGol-ud-un Aman Üliger" 'Qoyar Bökeli Mönggü-tei Aq-a Degüü Qoyar' Öbör MongGol-un Soyol-un Keblel-Gn Qoriy-a, Kökeqota. (ラシ & ドブチン編『スピモンゴルの口承文芸』呼和浩特：内蒙古文化出版社)
- 26 Sečenmönge (Ed), 1987, "Bayan UlaGan Qan" Öbör MongGol-un Soyol-un Keblel-Gn Qoriy-a, Kökeqota. (スチンムンク編 1987『バヤン・オラーン・ハン』呼和浩特：内蒙古文化出版社)
- 27 'Aral Mergen' 新疆ハラ・オソン県タビラハイト・モンゴル郡の DaJid-un OGoo (D.オゴー) 氏口述。筆者採録 (1985年6月10日)。

訳者注：

(1)本論文は1999年、『西北民族学院学报』（“BaraGun Quyitu-yin Ündüsüten-ü Degedü SurGaGuli-yin Erdem Šinžilegen-ü Sedkül” No.2, pp.20-31）に掲載された。

(2)『ハン・ハランゴイ物語』は、モンゴル国で語られる英雄叙事詩である。

(3)「昔は臍の緒を切るのに金物を使うことを忌み、葦、竹のへら、茶碗のかげら、貝殻などで切った。このとき、あまり短く切ると短命だとか、短気になる、小便が近くなるなどといわれた。胎児についている部分は5～8日で自然に乾燥して落ちる。落ちた臍の緒を真綿や和紙に包んで水引をかけ、生年月日を明記して、名付けの折の名前書の紙とともに保存することが多い」（「臍の緒」www.tabiken.com/history/doc/ アクセス時：2005年11月16日）。

(4)ジャダ石 (Jada-yin ČilaGu)：ジャダ石とは、古くからアジア大陸の各地でシャーマンによって使用された「雨乞いの石」とされる[村上正二 訳注1989『モンゴル秘史1』平凡社 p.324]。ジャダ石を降らせることをJada Briqu (ジャダを取る) という。

(5)マンガス (ManGus)：モンゴルの英雄叙事詩に登場する、多頭で凶悪な形相をした、様々な災難や現象をひき起こす魔神。人喰鬼ともされる。

(6)ホルモスタン・アブ：ホルモスタン (Qurmustan) とは、モンゴル仏教の概念では、33天の主神とされる。アブ (Abu) とは父親のことである。ホルモスタン・アブとは、「父なる天神」及び「父なる天」の意味である。

(7)ハーン (QaGan) 石：皇帝なる石。

(8)ハートン (Qatun) 石：皇后なる石。

(9)ウレル (Ürel) 石：さざれ石。

(10)エル (Er-e) 石：男石。

(11)エム (em-e) 石：女石。

(12)ホンゴル (QongGor)：英雄叙事詩『ジャンガル物語』における主人公の名前。

(13)ボトン (Botong)：英雄叙事詩『ジャンガル物語』における英雄たちのことはボトンとも呼ばれる。

(この論文の翻訳に当り、日本語のチェックを遠藤志保さんにお願ひしました。この場をかりてお礼を申し上げます。)

(B.だむりんじゃぶ・中国社会科学院研究員)

(ぼるじぎん おるとなすと・千葉大学大学院社会文化科学研究科)

An Idea of Rock-Worship in Heroic Folktale and Heroic Epic in Oyirad

writing: B.DAMRINJAB

translation: BORJIGIN Urtunasutu

Summary:

The common perception to deify stones and rocks is widely found in the heroic folktales, epics and myths of Oyirad. And, motifs of beliefs and customs related to rock worship too are variously narrated.

In the Stone Age, stone was the primary tool in the process of production. Ancient people made tools such as axes and swords out of stone and used it widely in vocational occupations, day-to-day life and war. Because stones and rocks were connected closely to the life of people in ancient times, they were matter-of-factly conscious of them and so deified them. Especially, as stones with shapes different from that of normal ones were made objects of faith and awe, diverse cultures with beliefs in stones and rocks were formed.

There are many instances found in the heroic folktales and epics of Oyirad that reflect the common perception concerning the role stone and bronze ware played in the history and culture of ancient society. That is an evidence of the trace left in the oral literature which has been passed down since the Stone Age. Stone culture and worship of rocks and stones have had a big influence on the heroic folktales and epics of the ancient age. And it is thought that examination into the origin of heroic folktales and epics would provide valuable suggestions about how the notions regarding stone culture of the Stone Age has deeply penetrated in there.

Beliefs regarding rocks and stones are one form of ancient beliefs among the various ethnic communities of the world, and have had a great influence on those of Central Asia, in particular. It is for this reason that the reflection of stone and rock-related beliefs in the oral literature of heroic folktales and epics, etc. is considered to be a representation of the thought of people of that age. These narratives found in heroic folktales and epics, not only reflect the vocational occupations of the Stone Age, but are indications of the traces of beliefs found in the oral literature whose origins go back to the ancient past of human beings and are regarding stones—ones that believed in the spiritual power exerted by stone ware.